

百年前の農人が 守ってきた風土を 百年先へ、継ぐ。

西会津町 新規就農ガイドブック

Nishi-Aizu Town New Farmer Guidebook



日本の田舎、
西会津町。

Traditional countryside in Japan.
NISHI-AIZU. ©

農業のフロンティアは、
中山間地にある。





約84%を森林が占める「中山間地」

まちの北部には「東北アルプス」とも称される飯豊（いいで）連峰がそびえ、山々に囲まれた雄大な景観が広がる西会津町。平地が少なく森林面積が土地の約84%を占める中山間地域であり、多様性に富む豊かな自然環境が魅力です。その一方で、農業の大規模化には適していない土地条件を持っています。

農家の7割が60歳以上

高齢化や担い手不足は、西会津町が抱える課題のひとつです。しかし、農業のベテランが多いからこそ、長年にわたって培われた栽培技術や気候・土壌に関する知恵など、マニュアルにはない“生きたノウハウ”が豊富に蓄積されています。こうした知恵こそ、地域が誇る貴重な資源です。近年では、若手や移住者がその知恵を学びながら農業に挑戦する動きも少しずつ広がっています。

土地を、風景を守る、農の営み

ただ作物をつくることだけが、農業ではありません。山々と田畑が織りなす日本の原風景を守り、土地を、資源を、つぎの代へ継いでいく。それが、このまちの人々が大切にしている農の営みです。先人から受け継いだ知恵と技を大切に、自然の摂理に寄り添いながら耕す。その姿には、この地で生きる“農人”の誇りが息づいています。

BRONZIER



INDEX

西会津町の特徴	02	季節ごとの特徴	11
西会津町の資源	03	このまちならではの取り組み	12
DATA・西会津の名産品	04	就農スタイル	13
西会津町で農業をやる価値	05	就農のモデルケース	14
移住×新規就農を目指す人	07		
移住×新規就農した人	08		
Uターン×新規就農した人	09		
地元出身×農業を継いだ人	10		

厳しくも、美しい、西会津の自然。 その豊かな環境が おいしい実りをもたらす。

福島・新潟の県境にあり、四方を山に囲まれている西会津町。

雄大な自然に抱かれたこの地域は、

さまざまな形でわたしたちの暮らしに豊かな恵をもたらしてくれます。



雪がもたらす 天然の水資源

冬に積もった雪は、春の雪解け水として田畑を潤し、山々や地下水を通して豊かな水循環をつくります。この清らかな雪解け水はミネラルを多く含み、ひとつ上の品質を誇る作物を育みます。

昼夜の寒暖差 15℃以上

日中は35℃を超える暑さとなり、夜間は25℃を下回る。夏場の昼夜の寒暖差は15℃以上。この日がほとんどです。西会津の農産物が「味が濃い」と評されるのは、こうした自然環境の恩恵によるものです。

多様性に富んだ 自然環境

西会津の田畑には、虫や微生物など、さまざまな生き物の姿が見られます。それは、この土地に豊かな生態系が息づいている証。自然と共に生きる農家さんたちの、丁寧な営みの表れでもあります。

土地の個性が 実りを育む

山あいの棚田、川沿いの水田、なだらかな丘陵にひろがる畑。西会津とひと言にいっても、標高や地形、土壌環境は地域によってさまざまです。この多様な風土が、個性豊かな西会津の実りを育みます。

DATAで見る西会津町の農業

年齢別農家人口

15～29 歳	79 人
30～59 歳	304 人
60 歳以上	974 人

令和2年度 世界農林業センサス
※個人経営体における年齢別世帯員数

営農類型別経営体数

生産物	経営体数
稲作	291
野菜類	10
麦・雑穀・いも・豆類	10
その他作物	9
複合経営	52

令和2年度 世界農林業センサス

耕作農地割合

田／845 ha
畑／312 ha

令和6年作物統計面積調査

主な作物

収穫量ランキング



		面積	10a あたり収量	収穫量
👑 1 位	水稻	547 ha	541 kg	2,960 t
👑 2 位	きゅうり	5 ha	4,200 kg	210 t
👑 3 位	そば	119 ha	42 kg	50 t
4 位	トマト	2 ha	1,500 kg	30 t
5 位	大豆	6 ha	50 kg	3 t

令和6年産作況調査（水稻・そば・大豆）
令和5年産作況調査（きゅうり・トマト）

西会津の名産品



にしあいづミネラル野菜

平成10年から続く西会津町の「健康な土づくり事業」の取り組みから生まれたのが、「にしあいづミネラル野菜」です。普及会に所属する農家が栽培し、うまみの濃い味わいが人気です。



西会津米

食味値が高く、ふるさと納税返礼品でも人気の西会津米。そのおいしさは、五ツ星お米マイスターもお墨付き。農家さんそれぞれに独自の栽培方法をもち、世界的なコンテストで受賞歴を持つ農家もいます。



きのこ

西会津産の生椎茸は、大ぶりで肉厚。お土産ショップや物産展においても人気商品です。特に夏は国内でも珍しい生きくらげの栽培・出荷も。会津管内で乾燥きくらげ生産量No.1を誇る農家もいます。



そば

秋の西会津を彩るのは、真っ白なそばの花。黄金の稲穂とともに揺れる風景は、この季節ならではの美しさです。集落ごとにそば祭りが開催され、地元の蕎麦屋では香り高い十割そばを味わえます。

課題先進地域だからこそ すべての人に、チャンスがある。

豊かな自然と共に生きる人の営みが息づく西会津町。

この土地は、山あいの地形や雪国の気候など、決して“やさしい”環境ではありません。

人口減少や担い手不足など、待ったなしの課題にも直面しています。

そうした課題先進地域だからこそ、視点を変えてみれば、

これからの日本の農業を試し、育てていくフロンティアでもある。

自分の手で、未来の農業を耕してみたい。

そんな人にとって、西会津はわくわくするフィールドになるはずです。

余白があるから、 チャレンジしやすい。

人が減り、耕作放棄地が増えている。そんな現実にも直面しながらも、その“空いた場所”や人口減少という隙間こそ、新しい農業や生き方を試せる余白です。何もないからこそ、何でもできる。あなたのアイデア・挑戦が、この町の風景をより豊かに変えていくかもしれません。



多品目少量生産で、 ニッチ市場をねらう。



西会津のような中山間地では、広い農地を確保して大規模化するのは難しく、「多品目少量生産」という選択肢もあります。一つの作物に依存せず、季節や土地条件に合わせて複数の作物を組み合わせる。それによってリスクを分散しながら、特定の市場や顧客層に的を絞った販売を行うことも、戦略のひとつです。





高付加価値で、 ブランド化。

中山間地の農業では、「どこにでもある作物」を栽培しても価格競争に巻き込まれやすく、どうしても生産効率では劣ります。限られた規模で利益を出すには、付加価値をどうつけるかが鍵。たとえば、栽培方法や品種、ストーリー性、販売の工夫など。地域資源や個人のこだわりを打ち出すことで、他にはない“ブランド”をつくることができます。実際に、独自のこだわりや土地の個性をブランド化し、リピーターやファンがいる農家も増えてきています。

ちいさく始めて、ゆっくり広げる。

農業は、始めてすぐに軌道に乗るものではありません。特に中山間地では、気候や地形に沿った栽培スタイルを確立するまでに時間がかかります。だからこそ、スタートは小規模から。少ない面積で、確実に育てる。経験を積みながら販路を整え、収支の見通しを立ててから規模を広げていく。それが、この地で無理なく、続けていくための現実的な道筋です。先輩農家とのつながりや情報交換も大切にしながら、ゆっくりと根を張ることが、結果的に大きな成長につながります。



ローカルから国内外へ、 ひろがる可能性。

西会津には、地域内にとどまらない販路を開拓できる環境があります。多様なバックグラウンドや個性をもつ移住者、地域と関わる都市部のビジネスパーソンたち、国外からも訪れるアーティストなど、町の内と外を行き来する人の流れが絶えず生まれています。こうした人の往来が、農産物や加工品を広げるきっかけになることも少なくありません。日本の田舎の味わいを、日本中へ、世界へ。地域の特性やつくり手の個性を活かせば、新しいつながりを育てていける。西会津の農業には、そんな可能性があります。



協力隊として、
3年間の修行中。
中山間地ならではの
農業をしていきたい。



伊東大樹さん

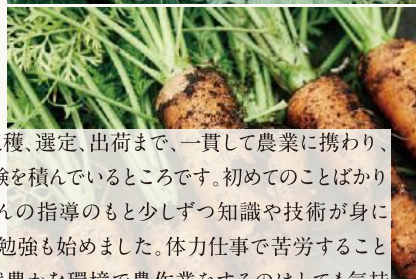
地域おこし協力隊 農業後継者(園芸作物)

2024年に移住／静岡県出身

栽培作物 アスパラガス・スイカ・メロン・白菜・キャベツ・人参・ブロッコリー

圃場面積 1ha・ハウス1棟(西会津町農業公社が管理)

出荷先 道の駅にしあいづ・農協・商社



中山間地に興味があった。

大学時代は農学部で学び、卒業後は企業に就職し青果売り場づくりをサポートする業務を担当しました。もともと農産物の栽培に興味があり、就職して3年経ったのを一区切りに、自ら生産者としての道を歩むことに。中山間地で農業にチャレンジしたいと考え、全国さまざまな地域へ視察に行きました。その過程で西会津町と出会い、地域おこし協力隊として農業後継者を募集しているのを知りました。任期の3年間は、経済的な不安に駆られることもなく、思う存分農業にチャレンジできる。町が推進しているデジタル技術を活用した農業振興の取り組み「石高プロジェクト」にも興味を持ち、移住を決めました。

卒隊後の暮らし・仕事づくりも。

今は、協力隊2年目。「西会津町農業公社」に所属するかたちで、

野菜の栽培から収穫、選定、出荷まで、一貫して農業に携わり、生産者としての経験を積んでいるところです。初めてのことばかりですが、専門員さんの指導のもと少しずつ知識や技術が身につくにつれ、農業経営の勉強も始まりました。体力仕事で苦労することもあります。自然豊かな環境で農作業をするのはとても気持ちがいいです。協力隊を終えても、この町で農業を続けていきたい。そんな思いから、町内でも特に山深い「奥川地区」で家を借り、協力隊卒業後の暮らしと仕事づくりを意識し始めました。集落の方々や、先輩農家の方に相談しながら農地を確保し、特に、いちじくやメロンなど、果物を手がけられないかと構想を膨らませているところです。

この土地だからできる農業を。

西会津町は「中山間地」という地理的な特性から、大規模な農業には向いていません。それは僕にとってデメリットではなく、この土地だからこそ栽培できる作物や、届けられるストーリーがあるのではないかと考えています。誰でもできる農業というよりも、この地域で、この風土で、僕だからできる農業って何だろう。そうした目指す姿に向き合いながら、独立にむけて少しずつ準備を進めています。これから先、さまざまな壁にぶつかる場面が増えると思いますが、ひとつずつ乗り越えながら、この土地に根を張っていきたいです。



親戚をつたって、農業の世界へ。

もともと関東で10年以上、プログラマーとして働いていました。これからのキャリアを考えた時に、改めて自身の働き方を見つめ直し、プログラミングの仕事から離れることにしたんです。そんな時に、西会津町にいた親戚を介して、町で菌床キノコ栽培を推進していることを知りました。再就職するか、独立するか。働き方を悩んでいたところ、農業という新しい選択肢ができて、興味をもちました。「ダメだったら、その時にまた考えよう」。町では、菌床栽培用のハウスのリース事業を行っているほか、研修も受け入れていると知り、思いきって農業の世界に飛び込みました。

研修を経て独立し、1万菌床を栽培。

西会津町に来てからは、菌床キノコ栽培を行っている事業者のところで、2年間の研修。ほかにも、町の菌床シイタケ農家を訪ねて、どれくらいの量を、どんなふうに栽培しているのかを見せてもらったりと、独立にむけて準備を進めていきました。ハウスを建てるための土地は親戚の紹介で借りられることが決まり、町のリース事業を活用して整備。自己資金と補助金を組み合わせながら、栽培施設・設備を整えることができました。現在は就農してから8年が経ち、ハウス3棟のうち2棟を稼働して、1万個の菌床を使ってシイタケを栽培しています。はじめは「キクラゲ」も手がけていたのですが、なかなか売り先が安定せず、シイタケにしました。シイタケ栽培は涼しくなる9月からシーズンイン。特に年末に向けて価格が高騰し、最盛期をむかえます。逆に、気温が高くなる夏はほとんど収穫できず、ハウスの掃除



や、次の栽培に向けた菌床の準備期間にあてています。最近では、時間のゆとりを持ちやすい夏の時期に、新しい仕事や取り組みを始めてみようかと考えているところです。

この地域ならではの豊かさがある。

未経験でスタートした農業。温度・湿度管理、シイタケがよく育つように菌床に刺激を与えたりと、思っていた以上に手間も時間もかかりますが、やっぱり、「おいしい」と言ってもらえた時は農業をやっていて良かったなと思います。都市部にいた頃とは、日常が大きく変わり、目にする風景も違います。農作業の合間にふと空を見上げて、虹がかかっているのを見たりすると、気持ちがふっとほどけるんですね。プログラマー時代には感じることもなかった豊かさが、今はそばにある。利便性でいえば、西会津町は不便な場所かもしれませんが、広々とした土地でじっくり農業に向き合える今の環境は、私にとってはいい暮らし方・働き方だなと思っています。

根本大輔さん

会津きのこ工房

2016年に移住・2018年に就農／神奈川県出身

栽培作物 椎茸 圃場面積 ハウス2棟 出荷先 農協





退職後、Uターン&就農。

「にしあいづミネラル野菜」で、 地元を盛り上げたい

石井亮一さん

にしあいづ健康ミネラル野菜普及会員
2024年に就農／西会津町出身・Uターン

栽培作物 ミニトマト、ネギ、ウド、パプリカ、ピーマン、白ナス、
唐辛子、ロマネスコ、ブロッコリー、カリフラワー、
キャベツ、大根
圃場面積 70a、ハウス7棟
出荷先 道の駅にしあいづ、農協、地元スーパー

※石井さんが栽培している「にしあいづミネラル野菜」について
P4で紹介しています



土地を枯らさないために。

長らく関東で会社員として働いていたのですが、退職を機に、地元・西会津町に帰ってきました。もともと家業として農業を営んでおり、農地があったんです。代々受け継いできた土地を枯らしたくない。そんな思いで、農地を引き継ぐかたちで自ら農業を始めることにしました。まずはハローワークが主催する農業研修に参加し、作物の種類や栽培方法を勉強。中でも、ミニトマトに興味を持ちました。たくさん収穫できる分、栽培の喜びもあり、食卓にならびやすい食材だからこそ、多くの人に味わってもらえる。そこでミニトマトを中心に、年間を通じてさまざまな野菜を栽培する「少数多品目」のスタイルでやってみようと考えました。

サポートがあるから、初心者も挑戦できる。

研修を受けたとはいえ、スタート時はまったくの初心者でした。そんな中で出合ったのが、町が力を入れているブランド野菜「にしあいづミネラル野菜」。未経験からでも挑戦しやすい環境に魅力を感じ、「にしあいづ健康ミネラル野菜普及会」の一員として一步を踏み出しました。ここでは土壌づくりや栽培技術について研修を受けられ、手厚いサポートを得ながら農業に取り組みます。ミネラル野菜づくりの要は、何よりも“土”。まずは土壌診断を行い、バランスよくミネラル成分を含む土を目指して堆肥設計をします。そうして整えた畑から、夫婦の二人三脚の野菜づくりがスタート。ハウスを整備し、種まきや育苗も自分たちの手で取り組んでいます。自然豊かな西会津町は、昼夜の寒暖差が大きく、冬には大人の背丈ほど雪が積もる厳しい環境です。それでも年間を通して栽培を続けられるよう、日々の細かな手入れを欠かさず、冬季は除雪機3台をフル稼働してハウスを守るなど、試行錯誤を重ねています。

農業から、西会津の未来を考える。

私たちの農場は、小高い丘の見晴らしがよい立地にあります。晴れた日には、とおくに「飯豊連峰」をのぞみ、本当に気持ちがいいんです。暑い日も、雨の日も関係なく作業があり大変だなど思うこともありますが、おいしそうに実った野菜を収穫して、生産者である自分の名前がついたラベルシールを貼り、出荷する。その瞬間の喜び、やりがいは、苦労を超えますね。就農して2年目、特に経営面では改善が必要です。農業にかけている時間・お金・人手を、今後、どう収益として伸ばしていくか。課題はありますが、町の主な産業だからこそ、農業から西会津町を盛り上げていけるように、引き続き工夫を重ねていきたいと考えています。



継ぐのは、僕しかない。

もともと、町内で土木や塗装の仕事をしていました。家業として農業を営んでいたのですが、僕自身「農業をやりたい」と思ったことは昔から一度もなくて。その気持ちが変わったのは、父から「農業やんのか?」と聞かれたことがきっかけです。「後を継ぐのは僕しかない」「やる」と返事をして、20代半ばから手伝いはじめ、2年目からは経営を担うようになりました。今は「坂井農園」という屋号で、ミニトマト・米を栽培しています。はじめはミニトマトではなくキュウリを栽培していたのですが、ブランド化が難しいことや、販路が限定されてしまうことなど、いろんな理由からミニトマトに変更。農地・ハウスは父から引き継ぎ、少しずつ規模を広げながら、町内でも特に山深い「奥川地区」で農家をやっています。

坂井農園のスタイルをつくる。

父から経営を継いでからは、自分の農業スタイルを確立しようと、学びの連続でした。町内外の農家さんや農協へ行ってノウハウを教えてもらったり、いろんな栽培方法にチャレンジしてみたり。例えば今でもミニトマトは、あえて土壌を耕さない「不耕起栽培」かつ農薬不使用で栽培しています。土中の微生物が増えて土質が良くなるうえに、おいしさも増すんです。今も試行錯誤の日々ですが、10年経って、「これが坂井農園の野菜です」と胸を張ってお届けできるようになってきました。

土地を、景観を守る仕事。

ミニトマトだけでなく米も栽培している背景には、ある出来事が影響しています。2022年夏に町を襲った豪雨災害。川が氾濫して、坂井農園の田んぼが泥だらけになり、荒れた土地を目の前にして、どうすればいいか分からなくなった時期がありました。「農業を辞めて逃げてしまいたい」。そう思い詰めるほど、絶望の風景でした。そんな時に、近所の農家さんや地域の人が支えてくれたんです。田んぼの整備や、遅れてしまった農作業のボランティア。そんな支えを受けて、「立ち止まってる場合じゃない。農業はこの土地を、景観を守っていく仕事なんだ」と、奮起しました。特に、「稲作」は山の土砂崩れを防いだり、貯水・治水の役割を果たしたりと、たんに食料をつくるだけではない、社会的・環境的機能を持っています。さらに坂井農園は、高齢化が深刻な奥川地区の中で、ほぼ唯一の若手農家。地域の方からの期待に、正直プレッシャーを感じる時もありますが、つぶれちゃいけないですね。より多くの人に、坂井農園の野菜や米を「おいしい!」って味わってもらえるように。「農業っておもしろい!」って思ってもらえるように。一歩ずつ、挑戦を続けていきたいです。



農業って、すごくおもしろい。

土木業から、

父の背中を追って農家の道へ。



坂井康司さん

坂井農園 代表

2014年に就農／西会津町出身

栽培作物	ミニトマト、米(コシヒカリ・つきあかり・天のつぶ)
圃場面積	ハウス11棟・田んぼ10ha
出荷先	ミニトマト／道の駅にしあいづ・農協・小売業者 米／直売・米販売業者



Facebook



Instagram

坂井農園 各種SNS

四季に抱かれて 生き、暮らす。

西会津の一年は、四季の移ろいと共にあります。
その自然のリズムは農の営みと深く結びつき、
人々の暮らしを形づくっています。

雪解け、いのちの芽吹き

春
雪解けとともに、山々には水がせせらぎ、土が目を感じます。フキノトウや山菜が顔を出し、生命のみずみずしさや循環を実感する季節。あたたかい芽吹を告げるこの時期ならではの高揚感があります。



色鮮やかに、のびのび育つ

夏
昼は強い日差し、夜は虫やかえるの声。昼夜の寒暖差が、作物のうまみと甘みを深めます。一方で、渇水や日照りへの備えも欠かせません。水の管理や土づくりなど、自然の変化に工夫を重ねる毎日です。

たわわな実りに、感謝を

秋
稲穂が黄金色に輝き、収穫の喜びに包まれます。山は紅く染まり、空気が澄んでいく。町内のあちこちで秋の祭礼や収穫祭がひらかれ、実りへの感謝と共におまつりのにぎわいで活気にあふれています。



白銀の中で、静かに種を育む

冬
一面の雪。まちには静けさと厳しさが訪れます。作業の手を少し休め、次の春に向けて準備を整える時間。除雪や配達などの仕事をする人もいます。雪国暮らしの苦労はあれど、雪景色の美しさは格別です。

つぎの百年へ 継いでいくために

田舎らしさを守りながらも、新しいことに
チャレンジし続ける西会津。つぎの農業を考え、
行動するプロジェクトが続々と生まれています。



石高プロジェクト公式HP

石高プロジェクト

「石高プロジェクト」は、ブロックチェーン技術を活用し、農家と消費者がデジタルでつながる新しい農業支援の取り組みです。収穫前の米予約購入やボランティア活動などの貢献を「石高（ポイント）」として蓄積し、収穫後に米と交換する仕組みを提供しています。これにより、農業のリスクを分散し、地域の活性化と持続可能な農業の実現を目指しています。



町内のモニターカメラがとらえたイノシシの写真

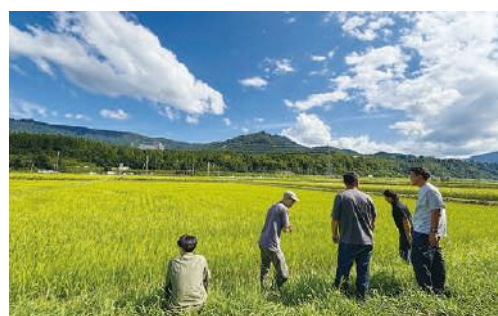
ジビエの利活用

西会津町では、田畑を荒らしたり、人間に害を与える有害鳥獣が増えています。こうした課題をそのままにせず、資源として活かさないだろうか。そうした考えのもと、安全性を確保しつつ、地域の新しい産業や食文化に利活用できないかと検討が進められています。（※令和7年現在、西会津町では原発事故の影響によりジビエ（ツキノワグマ、イノシシ、ニホンジカ）の出荷が制限されています）



有機栽培米の拡大・6次化

特に若手農家を中心に、有機栽培米の生産を広げていきたいという声が増えています。中山間地である西会津の地理条件や、自然に配慮した持続可能な農業、手間ひまをかけて育てる米づくりは、ブランド化につながります。さらに、6次産業化による加工品を企画製造・販売する取り組みも。地域資源を最大限に活かし、農業の価値と収益を高めています。



農家コミュニティ・勉強会

担い手不足・耕作放棄地の増加に、どう手を打つか。これからの農業を形づくろうと、西会津の農家どうしが世代をこえて連携し、コミュニティや勉強会があちこちで出来つつあります。町外への視察や、講師を招いたセミナーも開かれています。

next challenger is... YOU

経営スタイルは？

単一経営



労力・資金・土地などの経営資源を一種類の作物に集中させて行う農業形態です。機械化や効率化は進めやすい反面、天候不順や価格変動などのリスクは分散しにくい側面があります。

複合経営



複数の作物を組み合わせる生産する農業形態を指します。単一経営と比べてリスク分散や収益の安定化が期待できる一方で、作物ごとの管理や手間が増え、効率化はやや難しい側面もあります。

施設園芸



ビニールハウスや温室などの施設内で作物を育てる農業形態。天候や気温に左右されにくく、収穫時期の調整や高付加価値作物の栽培が可能です。一方で、施設の初期費用や加温・換気などの管理コストがかかります。

就農形態は？

雇用就農

農業法人や個人農家に従業員として就職します。安定収入を得ながら先輩農家から技術・知識を学ぶことができ、就農初心者にとってリスクの少ない方法です。雇用を経て、独立就農する人もいます。

独立就農

自分自身で農地や施設、機械を確保し、農業経営をはじめ「起業」を指します。作物や栽培方法、経営方針など自分の裁量で営農できるおもしろさがありますが、その分の責任もあります。

事業承継就農

高齢化などで後継者を求める農家の経営を引き継ぐ就農スタイルです。農地・設備・技術を活用でき、初期コストや準備の負担を抑えやすい点が特徴です。

町内の主な体験・研修先

農業研修

西会津町には県が認めた研修機関があり、研修を通して作物の栽培技術や知識、農業経営に必要なスキルを学ぶことができます。先輩農家とのつながりを築ききっかけにもなり、経済的な補助制度を活用することも可能です。



橋谷田ファーム(株)

〈研修品目〉
水稲・そば



目黒輝夫さん

〈研修品目〉
きゅうり・水稲・そば・野菜苗

農家弟子入りインターン「農人巡旅」

西会津町での自然と共生する暮らしや、新規就農に興味がある方を対象とした短期滞在型のインターンシッププログラム。農家を訪問し、リアルな実践にふれながら、西会津町の自然環境や地理条件、農業の魅力を知ることができます。

地域おこし協力隊

西会津町は県内でも有数の協力隊採用実績があります。近年は農業分野に特化した募集もあり、新規就農を志す人が地域おこし協力隊を経て独立就農も目指すケースも生まれています。

モデルケース（新規就農の場合）

西会津町のサポート

STEP 1

情報収集・相談

どんな作物?どれくらいの経営規模?どんな暮らしがしたい?市町村や県、JAの相談窓口、先輩農家から情報収集しながら、就農に向けたイメージを膨らませる。

就農や西会津の農業に興味がある方は、気軽にご相談ください。お気持ちや考えに寄り添いながら、西会津ならではの農業の特徴・支援策などきめ細かにお伝えします。

STEP 2

体験・短期研修

農家としての適性や、地域との相性を確かめるためにも、一度は現地に訪れて体験するのがおすすめ。先輩農家や各関係機関とのつながりができるというメリットも。

農家弟子入りインターン事業「農人巡旅」の企画開催をはじめ、体験プログラムを不定期開催しています。詳しくは西会津町役場農林振興課までお問い合わせください。

STEP 3

長期研修

農業法人や個人農家で、栽培技術・知識など農業経営に必要な専門性を習得する。

相談者の意向にあった町内の研修先を紹介し、受け入れ調整を行います。

STEP 4

就農計画作成

目標や栽培作物、資金、リスク対策などを整理し、就農計画書を作成する。その計画を市町村に提出し、認められて「認定新規就農者」となることで、さまざまな支援を受けやすくなる。

専門的な視点から就農計画やビジョンについてアドバイスし、計画書の立案をサポートします。

STEP 5

生産基盤の確保

農地・機械設備・資金など、就農に必要な要素を準備・確保する。

必要に応じて、各機関の相談窓口をご紹介します。町独自の支援制度もありますので、お気軽にご相談ください。



農林業関連の主な支援制度(詳細はQRコードから)▲

※就農のステップや方法は、その人のプランや状況によって様々です。まずはご相談ください。

就農や移住の相談はこちらへ!

CONTACTS

① 西会津町 農林振興課 農政係

就農前から就農後まで、農業に関する相談を受け付けています。

[TEL] 0241-45-4531

[MAIL] nourin@town.nishiaizu.fukushima.jp

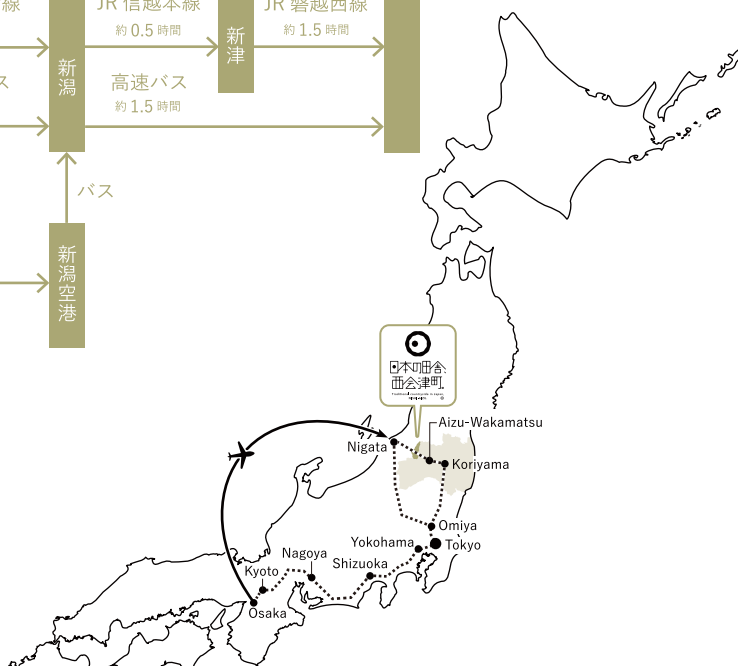
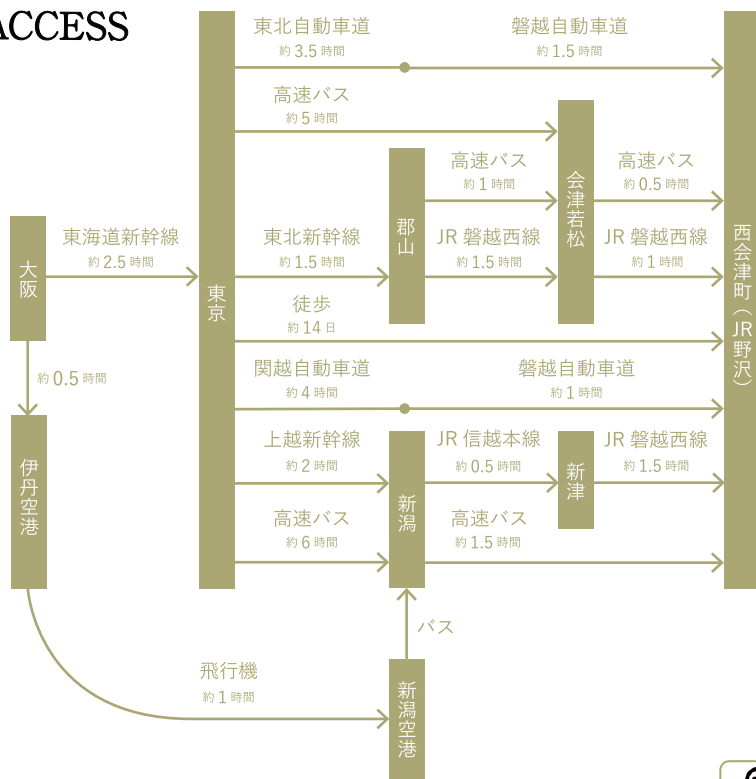
② 西会津町 企画情報課 西会津のある暮らし相談室

住まいや暮らし、各種支援制度など、移住全般の相談を受け付けています。

[TEL] 0241-45-2230

[MAIL] iju@town.nishiaizu.fukushima.jp

ACCESS



「日本の田舎、西会津町。」
Webサイト



「西会津町移住ナビ」
Webサイト



「農林業関連の主な支援制度」
Webサイト